

宮内紙工を訪ねて

村上 俊介

2013年2月25日（月）

午後、大王製紙、株式会社エルモア（同盟ブランドのティッシュペーパー製造）の工場見学の後、4時30分から宮内紙工金田工場訪問・見学。

この企業は社長宮内哲也氏を筆頭に、従業員数48名、資本金20,000千円、ラミネート加工紙を製造している企業である。工場を本社（四国中央市上分町）、金田工場、（同金田町）、観音寺工場を有する。今回訪問した金田工場では、紙あるいは不燃布にポリエチレンの薄膜を貼り付ける製品を製造している。紙にポリエチレン膜を貼り付けた製品としては、例えばハンバーガーの包み紙やお菓子袋など広く利用されている。また小包用の封筒や、不燃布のラミネート加工製品は病院シートなどに利用されているのを想像すれば身近に感じることができるだろう。

宮内紙工は昭和34年に開業し、現社長は3代目である。当初、紙漉に利用する糊の卸業を行っており、さらに紙紐から紙管（トイレトペーパーの芯など）へと業態を拡大し、加えて昭和51年にラミネート工場を建設して、この紙のラミネート加工を主業として金田工場、観音寺工場へと拡大してきた。

現社長の宮内氏は、実は専修大学卒業である。昭和59年卒業時、ちょうど前年11月に今回われわれが訪問した金田工場を新設し、新型ラミネート設備を導入したばかりだったので、卒業と同時に、家業を継いだ。また平成15年には観音寺工場を建設し、新たにドライラミネート加工機を導入、さらに平成23年には同工場に2号機を入れるなど、近年になってさらに事業展開を続けて現在に至る。ここ数年、急速な円高傾向により、輸出関連製造業が打撃を受ける中、宮内紙工は市場が国内であることから、為替の激しい変動に影響されることもないので、現在まで順調に成長を続けている。

四国中央市は紙・紙関連企業は約500社あり、うち紙産業は300社である。人口約9万人のこの都市は、紙の町である。大王製紙のような「紙」そのものを製造する企業から、宮内紙工やエルモアのように、その紙を様々な形で加工する企業が集積している。今回、社研の合宿研究会では、はじめてであるが、四国中央市で活躍されている専修大学校友会（宇摩鳳会）の方々との懇親会が開かれ、出席された同市市長井原巧氏（S61年経営学部卒業）や、同市産業支援課長補佐宮崎修氏（S60年経営学部卒業、同氏には今回の四国中央市での行程をすべてアレンジしていただいた）が異口同音に指摘されていたように、紙および紙関連企業の集積は、「注文

を断らなくてもいい」というメリットがあるという。たとえば得意先から自分の企業でできない注文を受けた場合でも、その場で注文を断ることなく、市内の別の業者にそれを依頼する形で対応し、得意先との関係を継続できるということである。「紙」に関わる多様な需要に、一企業としてではなく、地域の紙関連企業のネットワークで対応できるというのである。

このことは、紙に関わる異業種集積のメリットというだけではない。同業種集積でもそれが言えると、宮内氏は言う。「同じ市内の同業他社との競合はないですか」と質問したとき、彼は「同じラミネート加工といっても、やはりそれぞれ得意不得意があり、注文先から、どうも自分のところではやりにくい仕事だという場合、同業他社にその話を持って行くので、その点では同業他社との競合より相互補完という面が強い」とのこと。産業集積のメリットは業種の異なる企業の集積というだけではなく、同業他社との関係においても、単に競合関係というだけでなく、相互補完の関係を持ちうるという実態もある。

愛媛県（伊予）は大きく南予、中予、東予地方に分けられる。私は南予地方で生まれ育った。データによらない印象で恐縮だが、50年以上前から南予は農業・漁業・商業、中予は政治・文化・商業、東予は工業という区分があり、南予は宇和島市、中予は松山市という中心があった。これに対して東予は中心がもともとなかった。その区分は現在まで続いているが、様相は大きく変わった。

とりわけ南予の変貌は大きいように思う。まず1960年代まで日常的風景だった段々畑がなくなった。急斜面に延々と石垣の縞模様が連なる段々畑の風景は壮観であったが、現実には荷を担いで上り下りする作業の過酷さ、石垣を常に補修し続けなければならない労苦を考えると、段々畑の景観がなくなったことを嘆くのは、「人ごと」だからだ。もともと漁業の補完的役割を果たしていた段々畑での過酷な農業が、漁業（養殖）で生計が成り立ち、かつ段々畑に植えられていた甘藷、ハゼ、桑などの需要がなくなれば、急速に放棄されるのは当然のことだろう。現在はミカン畑を残して、ほとんどの段々畑が普通の緑の山に戻ってしまった。

漁業はハマチや鯛をリアス式海岸の入り江で養殖するようになった。時折、過剰養殖が問題になる。他方、真珠のいかだは海岸線からずいぶん減った。市場の不安定にさらされているからだろう。特産物ミカンは九州などとの競争が厳しい現実だ。振興に力を入れた観光業は、たとえば本州からのアクセスセンター松山市からは遠すぎるせいか、今ひとつである。こうした変貌の過程で、宇和島市は南予地方における中心地の役割をますます小さくしているように見える。交通の便が悪かったからこそ、中心になりえていたので、皮肉なことに交通の便がよくなることによって、宇和島市の美しく整備されたアーケード街には南予諸地方から人が来なくなった。シャッター街にはなっていないが、人通りが少なく寂しい。松山市までそれほど遠く

なくなったからだ。

だから松山市を中心とした中予は、政治・経済・文化の中心として、周囲の地方を吸収しつつ、同心円的に拡大発展しているように見える。昨年やっと松山市から宇和島市まで伸びた自動車専用道路は、それより南の整備された国道 56 号線と、スムーズに接続できる。こうして松山市に向かって人と物が吸収されるのである。

南予、中予地方と比べて、いい意味で中心のなかった東予地方は、今治市、新居浜市、そして四国中央市など、昔からそれぞれ特徴のある工業都市が併存している。1970 年代以降の、工場の海外移転、タオル、造船など、アジア諸国の低価格製品との厳しい競争などを経て、生き残りをかけた努力をしている。われわれは社研合宿研究会で、今回の四国中央市訪問以前に、すでに松山市、今治市、新居浜市を訪問し、そうした努力を見てきた。今回、四国中央市の活気ある紙関連企業をいくつか訪問し、担当者からその努力の一端を聞くことができた。

三地方それぞれに様相を変えてはいるものの、南予地方から見る東予は、やはり活発な「別世界」であるという印象は昔と変わらなかった。